

「おとうさん」「おかあさん」「おにいさん」「おねえさん」は、どれも長母音を含む語ですが、「おとうさん」だけは発音どおりに書きません。なぜなのでしょう。

「おじさん」と「おじいさん」を比べるとわかるように、現代日本語は短母音と長母音の区別がある言語です。ところが、古い時代の日本語には、短母音と区別されるような長母音が存在していませんでした。さらに、同じ語の中で母音が連続するという事もなかった言語でした。

しかし、時代が下ると、中国語から多くの借用語を取り入れたり、日本語の中で独自の音変化が起きたことによって、母音連続を含む語がたくさん使われるようになりました。例えば、「高(かう)」「功(こう)」「計(けい)」の()内のかなは歴史的仮名遣いによるものですが、かつてはそのかなのとおり発音していました。これらの母音連続が、後に長母音化して、日本語の中に長母音が誕生します。「かう」と「こう」は後にともに「こー」となり、「けい」は「けー」となりました。現代日本語で、オ段やエ段の長音を普通、「う」「い」をそえて「こう」「けい」のように表すのは、かつての表記をうけついでいるためなのです。

「こおり(氷)」や「とお(十)」の中のオ段長音は、「う」をそえた表記になっていませんが、これらはかつては「こほり」「とを」のように書かれ、「こうり(功利)」や「とう(冬)」とは違う発音だった語です。

「おねえさん」の中のエ段長音が「い」をそえた表記になっていないのは、この語が比較的新しい語であることと関係しています。「ねえさん」という語は、江戸時代の文献に初めて現れる語で「あねさん」から変化してできた語です。表記も当時から「ねえさん」であって、「ねいさん」でないのは、おそらくこの語が誕生した当時の日本語がすでにエ段の長母音を持っていて、かつ、「い」をそえて書かれる他の語(例えば「ていねい」)の発音が、その頃には長母音になりきっておらず、二重母音の発音との併用だったためと思われます。

ところで、「おとうさん」は明治末期以降の国定教科書で使われてから普及した語(それ以前は「おとっさん」)で、よるべきかつての表記というものが存在しません。現代日本語では、オ段の長音は「う」をそえるものの方が圧倒的に多いので、「おとうさん」はそれにならった表記なのでしょう。